

アラン
海辺の対話
(上)



高村 昌憲 訳

アラン『海辺の対話』(上) 高村昌憲訳

第一の対話

第二の対話

第三の対話

第四の対話

第一の対話

《政治》 私は民衆大学に参加していた時代に、理工科学校生のルブランと知り合いになりました。彼は大変に若く、そして私は既に社会に出ていて、決して実現を見ませんでした。政治の変革を夢見ていました。幾つかの大組織には恐らく動揺しかありませんでした。そして私たちは、取分け下部からのプロレタリア精神を理解出来ずにいましたし、それに欠けていたのです。そして彼は、職業を覚えると何かを知ると信じていますから、その点では失敗します。それが何時も間違いである以上、私たちは真の運動に成功出来る前に寧ろ無知であり、それが職業に関しての認識でした。私たちは真実と虚偽が同時にあるものへ出発しなければなりません。そこからは決して抜けられません。結局のところ、そこで精神を立て直すことであり、間違いは何でも救済される様に適用されるものでもあります。例えばセメントです。半分流体で大変迅速に硬く結晶化して変化しますので、原子段階での最初の輪郭が是非とも必要です。しかし、ルクレティウス (1) の様に思考しなければなりませんし、次にはタレス (2) の様に思考しなければなりません。その代わりに私たちは取分け政治を論じていました。でも、それは政治家を支援出来る政治ではありません。ところが私たちの粗野な友人たちは観念のための願望を手に入れていましたし、多分私たちも同じでした。《出会い》 私たちが岬へ行った時の思い出に移って語る時です。私たちの右側には実った小麦が続き、左側にはホメロスが大変良く言った様に実りの無い海です。《絵画》 私たちが、すっかり白髪になった画家の処に迂回して降りたのはその時です。ルブランは彼に私の名前を言いましたが、この出会いはまるで自分自身で行えたかの様です。短い挨拶をしました。この画家は、私がパンフレットの短文を書くのとは違ったやり方で知り合いになったことを喜んで見えました。実際に、彼の職業は決して画家ではありません。寧ろ画家になって哲学を休んでいたのです。そして両方とも可能であったことを、この後を見れば十分にお分かりになるでしょう。私は、極めて真剣な一種のミューズ (女神) とイタリア様式を忘れるべきではありません。年齢によってミューズと巫女の差を忘れるべきではなく、その視線によって私は友人を判断したいのです。

私にも画家の趣味があります。そこに私は時々執拗さを付け加えます。これらの訓練によって私は、恐らく最も服従させられることがなく誰でも最も軽々しくは信じない画家の精神というものを疑うに至りました。何故なら、自分の全ての思想を信用しない画家よりも、もっと素早く学ぶ人間は決していないからです。この種の精神は決して屈しませんが、一般には少しも発展しません。単に芸術にとっての大損害がなければ、私たちは哲学も芸術も両方とも自分のことを話す偏執への薬として絵画を理解すべきでした。その後で私たちは絵筆を何本も手に持って哲学しました。それは長い沈黙によって可能にします。彼には合っていると読者は想像するでしょうが、色々な話の中でも難しいことなのです。何故なら、私にはやり方が分からない絵画が殆ど直ぐに最も不毛な道に私たちを導いたことを、私はお知らせしなければならないからです。そしてイタリアのミューズが、私たちの厳格で厳しい話を制止するための忍耐を所有していたことに私は驚嘆します。

《外観》 この老画家は言いました、「この雲はすっかり変わって仕舞った。ほら、海はワイン色だ。最後には外観に止まって存在を探したのが我々である。しかし何故なのか」

私は言いました、「外観とは、外観で十分なものです。決して全てが真実ではないのでしょうか。あるいはあなたは、これらの多くの反映には何らかの間違いがあると主張するのでしょうか。これらの閃光の一つは、集められて測定され、太陽の正確な高さや波の力や大気の暑さや、最後にあらゆることが与えられるに違いありません。」

老人は言いました、「全てのものであり、我々がいる場所も同じだ。そして私の視線の湾曲そのものや、余りに激しい爆発音の思い出に残されるかも知れない労苦そのものも与えられるに違いないのだ。奇妙な境遇だ。我々は全てを所有しているし、所有し過ぎだ」

私は言いました、「非常に所有していますし、それでは我慢出来ません。というのも目は過去の時を保存しますし、最早存在しないものをその様にして存在の中に混入します」

老人は言いました、「そうではない。私の目の疲労は、この世の現在の状況に属しているのだ。そして非存在は何ものでもない。我々はそれ故に役立っているし、満足させられていて、全ての存在はこの外観の中にある。《ヘーゲル》 更に私はヘーゲルの偉大な言葉を思い出す。つまり存在は、それが起こす以上に良いものを現すことが出来ないということである」

ルブランは言いました、「私は、愚かにならない様に移動するのを求めます。あそこの正方形の畑は、鋭角や鈍角を持った平らな図形として私には見えます。私にはあるが儘のものとして見えません」

私は彼に言いました、「正方形とは何でしょうか。正方形の畑がそこにあるのでしょうか。正方形は存在するのでしょうか。私は誇張しすぎました。私はあらゆる方法で打ち負かしたかったのです。それは最初の運動ですが、私たちを支えているのもその運動であるからです。常にそうでなければならない様に、私をお手本に近づけること、そして同じ畑の眺望が如何にして場所を明確にして、そこから私が見ることを示すべきでした。一つの場所以外に真実は何もありません。《相対性》 そして、そのものは普遍的な思想であり、相対性を消すものでさえあります。しかし、この遅れた思想には言葉が無い儘です」それからルブランは、彼の技術者としての視線を私に向けました。

老人は、私たち二人を代わる代わる見詰めて、笑っている様に私には見えました。それから次に小麦や木々や屋根に目を移してから、葡萄酒色の海へ戻りました。老人は言いました、「あなた方はここにいる。私が十分に認識している二人の人間だ。あなた方のうち一人は、建築出来るものなら何に対しても強化されたコンクリートで建築したし、もう一人は言葉で築くことが出来るものなら何でも言葉で築いたのだ。もしも我々三人の原子の出会いが何らかの新しいものを作らなければならないとするなら、石や大地に関するものを十分考慮してはならないのだ。《大地》 それらは我々を支えるし、そんな風にして大変良いものになるのだ。我々の幸福のために、それらが止まっていることを我々に信じさせてくれる。そして、人間は屋根に瓦を置き直したり、何時も同じ畑を作るために土を掘り起こしながら再び我々の目をくramsすのだ。そこから、これらの形状には道理があり、理性の道理を与えなければならなくなるだろう。この大地は形而上学者だ。いや寧ろ、我々のイオニアの椅子で海を見ることを確保するだろう。《大洋》 何故ならここでは諸形状が決して存在していないことを我々に確信させているからだ。一つの波の横にはもう一つの波が無いのは明らかである。反対に、どんな海も諸形状が偽りであることを絶えず表している。これらの走る波を見なさい。だが、波は決して走っていない。各々の水滴が上がったり下がったりしているだけだ。その上、水滴というものも決して無いのだ。この自然の流体が、我々のあらゆる観念を拒んでいるのはまさに明らかである。寧ろその流体は我々の間違ったイマージュを拒んでいて、幾何学者には恐るべきものそのものである。大河も又、余りに大河そのものであり、我々の純粋な思想を自分たちに送り届けるためであっても、その外観は海と同一のものである。大洋は悟性にとって選択の対象であり、潮の流れが無い海が最良であることを私は良く言って来た。大洋は色々な偶像の破壊者である。従って我々の観念は事物から分離され、道具の様に両手の中に止まっているのだ。何故道具なのか、その理由は決して尋ねないが、道具は利用される。ここでは理性が、理性そのものに後退したり遡ったりしないで前進するだけである。ここでは理性が適切な法則に従って理性そのものを分割したり限度を設けたり禁じたりして、決して事物が形成されることはない。というのも海の中で堀を掘ることは決してないし、境界に植物を植えることも決してないからだ。《悟性》 そして、理解することは争うことを改めるので、悟性の哲学

によって争いを終わりにするに違いないと私は考える。ところがこれが最も軽蔑された世界の事物なのだ。はい、とか、いいえ、によって解決することが望まれているのである。しかし、精神に従って、はい、とか身体に従って、いいえ、とするのは常に体制のものであり、その根底には政治的体制がある。私は王を弁護しない唯心論を殆ど知らなかったし、反対に王を弁護しない唯物論も殆ど知らなかった。そして、これらの野心的な思想は一つならずの方法で、私が信じているものだが、壁や家や村や町を作る大変良く積まれた全ての石と結び付いているのだ。永遠の形状と一定の原子は奇妙にも両親である。両面から自由は死ぬのだ。観念から事物への関係を解明するのは、より一層難しく常に大変遅れてそこにやって来る。それ故に私の年齢になれば、私が若者と呼びたいのはあなた方である。私が望むのは我々の出会いが決して無駄ではない様に、海の傍のここからあなた方が見詰めることである」

《理性》 私は彼に言いました、「あなたの言葉には多くのものが一緒になっています。あなたが言う軽蔑されたものでも、英知は決して対象から分離しません。自分を対象と思うことも決してありません。何故政治が形而上学的であり、そして大変早く形而上学的な政治になるのかを、あなたは私に理解させてくれるに違いありません。何故なら、理性とは放浪する悟性であり、命令によって決めることしか出来ないからです。そして命令を出すのは情熱です。そこからこの必然性は大変に深刻にも無用になります。そして何かのためとか、何らかの名において人々は暴政を行います」

ルブランは言いました、「悟性という政治に、この地球上では既に決して出会うことがなかったのは事実です。学識が深くなるには余りに遅いですし、荒々しい友人たちと一緒に私たちが探していたのは恐らくそのことです」

老人は言いました、「いや寧ろあなた方は、余りに高く綱をもう一度張って、理性という道を通って悟性を探していたのである。それというのも我々が豊富に所有しているのは目的であるが、方法は余りに少ないからだ。如何にしては、何故かによって殺される。そして、そこには宗教の戦争がある」

ルブランは言いました、「私が今望むことは先生よりも賢明になることです。 《車輪》 そして私の先生の思い出は、車輪についての研究のことです。当時は、帰納と演繹と学校のあらゆる知識には手を付けないで、あなた方は馬車と橇を比較したりしました。車輪は地面と擦れることはなく、感知出来ない程に輻を地上へ落下させるだけです。その代わりに馬車は、決められた道の様に油をさされた車輪の中心部を引っ張ります。馬車は車輪と共に運び去ります。それ故に走った跡は、車輪の内側のここにもあります。車輪の中心部は橇のスケート部分と見做さなければならず、それは曲線状の軌道に圧力をかけることになり、何時までも前方を低くして後方を高くします。結局のところ車輪はこの曲線状の軌道でしかなく、限りなく上下に動きます。でも、車輪が地上を回っていた間、私が海の上や大気の中をあらゆる意味で追っていたのは別の話です。これらの話は今日では、既に私には完全に現実の様に思えます。もしも馬車の車輪が何であるのかを同時に知って知覚したならば、この世を存在する様に見るだろうと私には思えると言いたいのです。しかし、学校の〈神〉は私から普通の自然を奪って、理性と欲求の間を引き裂いたのだと私は推測します」

老人は言いました、「もしもあなたが普通の自然に後悔したなら、それは些細なことではない。力の要所である車輪は奴隷制度と同じ様に、少なくとも体刑であると言わなければならない。多分、難し過ぎるのだ。我々は十分にその始まりを見ていないし、その始まりはころである」

《ころ》 私は言いました、「ころには最早全然揺れはありません。従って奴隷状態も短く、ころを持ち運んだり石の塊の下に新たにころを滑り込ませたりします。その様にして我々の思想も前進すれば良いのですが。反対に車輪上の足は運命を描く様なものです。我々の下らない思想の何というイメージでしょう」

ルブランは言いました、「車輪上の勝者です。アキレス(3)の時代でも現代でもそうです。しかし、もう一度車輪上の足を私たちは考えることです」

老人は言いました、「それから車輪についての研究は虚しいものだが、恐らく全く意味がない訳ではない。人形の馬車を引っ張っている少女の疑問への解答を求めたばかりだった。何故車輪は滑らないで回転するのかしら、と彼女は言ったのだ。」

私は言いました、「回転することとは何でしょうか。その始まりから開始しなければなりません。力学以前の幾何学です。車輪以前の円です。私たちにはそこに永遠の観念があります」

老人は言いました、「もっと良く、もっと良く考えよう。円以前に角度だ。アリストテレスが非の打ち所のない神を作ったこの不変の円は、恐らく謎の源であり、不可解な明晰さの見本でもある。私は円が再び描かれなかった精神の貴重な瞬間のことを良く考えた。その線は何時も我々を騙している。何故なら、それは決して線ではないからだ。それは描かれているだけである。もしも円が描かれていないなら、何ものでもないのだ。以上は、如何にして観念が事物になるのか、ということである。ところが、もしも角度を私が開けたり閉じたりするなら、角度はあらゆる限界の向こうへ宇宙全体を掃除するし、可能な全ての円を一度に発生させたり、そのことによって全てを消すことさえもある。そして私は、円の観念が正方形よりも最早丸くないことをまさに理解しようとしている自分を時々見せられたのである。しかし直線を拒む直線とは別のこのイマージュを考え込むのは、疲れることである。直線のイマージュそのものが、直線を拒むことを理解するには時間が必要である」

ルブランは言いました、「折り畳み式物差と一緒にあなたが海と同じ位に動く数々の三角形を生ませたり死なせたりしたことを、私は又思い出しております。私たちの白亜のほっそりした線状は、私たちに何も獲得させませんでした。何故なら、拡大鏡で見ると石灰質の景観であるからです。そしてそれらの景観は、メートルが線ではないのと同様に線ではないからです。勿論、円は私たちをうっとりさせます。上手に描けた図形としての審美眼を私たちに与えますが、全てが失われてもいます。賢人は最早技術者でしかありませんが、技術者と言って欲しいのです」

老人は言いました、「観念の様に見えるこれらのイマージュによって、我々はその形而上学者であり政治家である」

《モンテスキュー》 私は言いました、「よろしい、私は悟性の人モンテスキューが自分自身に説明しようとしたことを理解し始めます」

ルブランは言いました、「そうです。書かれた法律以前には決して正義がなかったことを主張するのは、円を描いた以前に全ての半径が等しくなかったことを強く主張する様なものです。でも、これは殆ど彼が書いていたことです」

老人は言いました、「そして、どんな曖昧さも可能であり、極めて明瞭な書式も閉じ込められているのである。そこに隠されている観念には恐らく順序があって推移するのであり、それに従って直線が最初であり、そして真の円が描かれるだけである」

私は言いました、「直ぐに描かれて直ぐに消える、と付け加えて言われるかも知れません。それというのも観念は逃げ去り、イマージュになるものを全て拒むからです」

老人は言いました、「従って悟性は聞くことから生じるのだ。それは見るのが、理解することにとっての折衷的方法でしかないのを我々に教えているのだ。寧ろ、折り畳み式物差の方法によって我々の角度を壊してみよう。この行為は自然である。そして、波の運動と同じ位に根底では捕らえ所がないのだ。《事物》 しかし、事物は常に我々の対象であり、我々の唯一の対象でもある。人間の影が人間と同じになる時刻になると、ピラミッドの影もピラミッドと同じになるとタレス（2）が言った時、タレスが発見したのは相似形である。しかし彼は決して線を引かなかったのである」

ルブランは言いました、「図面でない線とは何でしょうか」

《直線》 老人は言いました、「図面も無く思考され得る線でしかないのだ。一つの星からもう一つの星

までの直線は、純粋に思考されたものである。二点の間の距離は直線である。宇宙には類似の線が沢山あるが、この世に決して無いのは一本の線でしかない。それが直線である」

私は言いました、「とはいえ世界が無ければ、私たちは如何なる線も思考出来ませんでした」

老人は私が言うのを止める素振りをして言いました、「世界が無いとは。奇妙な仮定である。世界は我々の全ての狂気の始まりであると、どちらかと言えば私は信じている。我々を正確に力強くしたり、一連の対象によって我々の一連の思想を調整したりする瞬間をこの世界が止めることが出来ると仮定するのは、まさにそれ以上に奇妙なことである。しかし優れた精神の人々は、多分そこまで敢行出来ると信じたのだ。彼らは他の沢山のことを行ったので、それらが間違いだったことを大変良く知っていたし、その様な最新の原子や一点やその種の事物以外がこの仮定を大胆にしなかったのだ。確信された懷疑以上に稀有なものは何も無い。しかし我々はそこに行くだろう。今は、ここで我々の背後にある政治的強制から逃れたり結び付けられる幸福によって、我々は思想の一部分を旋回させているのだ。《秩序》 その様にして数々の世界は生まれる。それらはカオス（混沌）以上の何ものかである。幾つもの影の中の影でも、手で触れないものでも、死者の穴でもなく、私に言わせればそれは決して私が作らなかつた秩序である」

ルブランは言いました、「空疎で不思議な話し方を秩序へ立ち返らせることです。それ故にその儘の秩序を軽蔑しよう。しかし秩序を作り出そう」

私は言いました、「秩序は決して存在しないでしょう。数々の事物の間に秩序を仮定しても、自然に決してお互いに先行しません」

老人は頭を上下に動かしてより一層重々しく真剣になって、老人は言いました、「決してデカルトを引用しないだろう。デカルトは我々を閉じ込めるからだ。この旅人は自らの思想を砕く術を知っていた。しかし弟子にとって危険なのは渦巻や神や魂が至る所で明瞭になるけれども、これらの目に見えない裂け目の表面を通して固くて入り込めない水晶を一緒に創り出して、それらが壁も創っているからだ。その時は巡礼杖の様に、我々は透明な障害物に躓いて戻って来るのだ」

《スピノザ》 「スピノザです。私は崇めますが、酷く嫌いでもあるこの名前に我慢出来ませんでした。それは神であり偶像です。私たちが愛して熟視するこの完成された人は、直ぐに私たちの上を閉めて、私たちを閉じ込めます。全てが行われて治療法はありません。時間は消えます。この荘厳な建築物に偉大な光と、恐らく逃げ出すためのドアが無い訳ではありませんが、自由な人はその時ドアを探すことだけに一所懸命です。そして私たちは、私があのジュピターの眉に見た様に、弁証法の中へ落下して行きました。幸福によって緋

色の薄暗い大きな雲が私たちの方へ進んで来ました。雨の矢が散らばって放されました。突風が海上を走って行きました。逃げなければなりません」

《夜》 私たちの前方には幾つもの光が輝いていました。私たちは、夜と安息と閉じたドアを意味する村の音を沢山聞きました。秩序と家庭と眠りです。人々が集まるものが、私たちには別れになりました。自然が祝福するものは、私たちの思想を乱します。(完)

(1) ルクレティウス（前 98 頃－前 55）は、古代ローマの哲学者・詩人。エピクロス（前 341－前 270）の思想を継ぎ『物の本性について』の哲学詩を書いた。

(2) タレス（前 625 頃－前 547 頃）は、古代ギリシアの数学者、物理・天文・地理・哲学者で、七賢人の中で最も有名で古い。

(3) アキレスは、神話上の詩人ホメロス（前九世紀）作といわれる『イリアス』の英雄の一人で、トロイア戦争でヘクトルを倒すが、後にパリスの射た矢が踵に当たって死ぬ。

第二の対話

《三角形》 ルブランは折畳み式物差を手に持っていました。そしてある時、三角形を平たく動かして小さくして行き直線にしました。三つの角はそこでは横たえて無くなって仕舞いました。又ある時は反対に二つの角を、第三の角が頂点になって雲の彼方に消えて行くまで広げましたが、まさに最も遠い天体の彼方までであることに気付かせてくれるかの様でした。二つの角を私たちが点検し続けて、第三の角が非常に遠くへ逃れて行くのは驚嘆すべき関係です。土地の測量士たちがユークリッドの証明だけとか経験論的な検証さえも信用しながら、網の様に三角形に向かうのは昨日のことではありません。そして同様に網は決して魚の形をしていませんし、その様に計測された事物が三角形のものであるか否かを知ることには彼らは少しも気かけません。画家が明るい時間の色を決めようとしたり、波を銀色の糸で縁取ろうとしたりする間に、これらの簡単な観念が呼び起こされました。私に関しては、まさにミルクで一杯に満ちたお椀を少しでも速く運ぶ困難を考えながら、常に東方へ傾けている地球の運動を知覚しようとした。そしてカップの中の動く水の動きであっても、もし私が可能であったなら、細長く月までも変形して行くもう一つの地球をきちんと計算しますし、分離された山々であってもまさに太陽までの距離を計算します。

《潮》 半分明るい月は大空の四分の一の処で太陽を追っていますし、小潮が既に静かな歌を歌っていました。その拍子はシチリア風で眠った様なものでした。しかし精神は目覚めていました。

《ユークリッド》 「動く三角形についての考察を行ったのは誰でしょうか」画家である老人のこの質問に対する答えは一つではありませんでした。

ルブランは言いました、「全ての角は土台となる直線上に横たえに来ていて、平らになったこの角は全体を集合した角度の数値を私に与えます。常に広くなると同時に別の二つの角度を消し合う三角形の頂点をご覧ください」

折畳み式物差を使いながら今度は私が言いました、「もしも私が土台となる二つの角を広げたなら、頂点の角度は無になりますし、同一になります」

老人は手を挙げました、「それは間違っていない。我々は実際の思想に幾つも触れているのだ。そして、三角形は形状というこのオリンポス山における農耕の神サトゥルヌスであり、円のジュピターと孫とまさに判断力によるひ孫の関係による、と私は好んで言うのである。《大きさ》 しかし、もっと古い神々が常にいる。実を言えば、問題の全く唯一の角度が三番目の直線に支えられていなければ、それは曲がりくねった運動の中で乱れる危険を負っているけれども、自らの単純さの中で角度の純粋な大きさを考察したいのである」

「それ故に一つの角度を作り、そして一つの角度を思考したいと思うと、三つの角度を思考するためには三本の直線でなければならないでしょう。私が行ったこの考察について、私たちは回転する色々な大きさの関係が、この大きさそのものから決して分離するが儘でいかなかったし、大きさの観念は観念であってイメージではなく、相関関係そのものであったと言うに至りました。何故なら大きさはどんなものでも単独で分離されているが如きものとは何なののでしょうか。比べ様もない大きさがあるのでしょうか。宣言された関係が無いならば、他のものの大きさと対応させる全く経験に基づかない別の比較があるのでしょうか。《色々な数》 そして、もしも大きさが私たちを他のものに送り返さないとするなら、最早どんな大きさも存在しない危険を負うことになります。最も単純で、恐らく最も顕著な事例は、一連の色々な数によって与えられます。その本質は常に数そのものを何処までも延長させるものです。もしも私たちが二や三やその他の色々な数を考えないとするなら、一とは何を意味するのでしょうか。勿論、これらのプラト

ン学派の見方は何らかの混乱もなく決して進みませんでした。というのも一連の色々な数は一種の謎であるからです。少なくとも序数と基数という二つの関連した連続がなければなりません。私たちは従ってこの透明な水の中で溺れました。少なくとも老人は沢山の遭難を見ました」

老人は言いました、「必然性から解放されること、その時に誓って断言した仮説によってしか把握しない儘でいることは美しいものである。しかし敢えて言うとするなら、この状態は呼吸すべき我々のためではないかも知れない。人は仮定し、そして証明するのである。仮定を変えて証拠に行き当たるのだ。ユークリッドは自分の裡に相反するものも持っていたのだ。

《相関関係》 この世は必然性によるのであって、仮説によるのではない。というのもこの世は我々を支えていて、恐らく我々の思想の調整器でもあるからだ。自然には三角形も直線も数も無いけれども、我々の思想には自由が無い訳ではない。しかし、我々の思想は恐らく反対者の前でしか自らが自由であることを知らないのだ。要するに我々の最も分離されて自由な思想は、大変に僅かであるが対象の何ものかを表すために縛られていることもあり得るのだ。そして世界の必然性は我々を捕らえているものであり、パスカルが言う様に、どんな海でも一つの石に対しても動かしている様に、如何なる部分も他のものから分離させられないものであるので、最も単純な我々の観念においても我々は何らかの当初の相関関係を持ち続けて来たと思うのは間違いではないのだ。例えば決められた生成の法則に従った一連の番号を思考することは、弁証法的に思考することになる。その代わりに一連の番号とそれらの順番の番号との一連の対比を一緒に思考することは、既に物理的に思考することになる。《回転》 それというのも自然の抵抗から分離された悟性は理性であるが、証拠しか見出さないからである。その代わりに事物と厳密に張り付いて常に包含された儘の理性は悟性であり、結果そのものの中に理性を見出すのである。しかしそれは法廷のものであり、その根底は政治的であるのと逆の歩みを裁く時ではない。少なくとも常に事物の方への観念による真っ直ぐな歩みを保持すべきである。そして、我々が簡単な道具の中で思考するこの三角形は、手段が理由を消して仕舞うのを我々に示すのに適するものである。それ故に回転するこの大きさを探究しよう」

ルブランは言いました、「もし私があらゆる直線を考えるなら、そして最初の位置と相次ぐ位置を比較するなら、一つの角は頂点から出る二本の直線になっているし、向かい合ったこれらの角が常に等しいことを先ず見分ける様に配慮します。《角度》 そして、回転するとこの大きさは、向かい合った他の二つの角によって同様に表されますし、それらの角はもう一つの角が大きくなる間も等しい儘で、一緒に小さくもなります」

私は付け加えて言いました、「私にとって注意力に相応しいと思えるものは、回転する線が線そのものの上に戻って来ることであり、二回目は回転する大きさが完了する結果になるのであり、一回目の回転が行われても新しいものは何も私たちに与えることが出来ません」

老人は言いました、「しかし、その回転に関して二つの方向をもう一度見分けなければならない。少なくとも二つの方向だ。私の一つの角度は大きくなるか小さくなるかしなければならない。別の変化を受入れることは出来ない。そしてもっと正確に言うなら、別の二つの角度と共に三角形を形成する三本目の直線を常に考えながら、或る方向へ他の直線との関係で回転する直線も必然的に同じ方向へ回転することに私は気付くし、平面上の他のどんな直線との関係からも同じ様に気付くのである。単にそれは常に三角形の内角を成している補足する角度であり、その角度は最初の角度が減ったり増えたりするので、増えたり減ったりするからである。そして、三つの直線が真実である時には、三つの角度の合計が不変であるのが正しい理由も以上のとおりである」

私は言いました、「そうです。しかし私は、もしも私の三角形を一点になるまで小さくしたなら、この理由を恐らくより一層明白な言葉で表すでしょう。何故なら、こうした訳であなたには中心点の周りの全ての角の合計は常に考えられる回転のどんな大きさにもなるでしょうし、あるいは所謂四本の直線にもなる

でしょう。《主張することなし》そして、その合計は三角形の三つの角度とその反対側の角度を含み、更に私はユークリッドの結論を把握しますが主張することはなく、そして単に私は最良の認識によって回転する大きさとは何であるのかを理解するのです」

沈黙の後でルブランが答えました、「全ては明白です。あるいは殆ど全てが明白です。私は三角形そのものを把握するための一点の上にあります。つまり一の中に全ての三角形があるのです。しかし、それは直線でないのでしょくか。あるいは視覚のことなのでしょう。そして観念は決して目に見えない、と私たちは言っていたのでしょうか」

私は答えるのを興味を持って待ちました。というのも、私には悟性を想像力の方へ引き寄せる傾向があるからです。如何に私が答えたのかは次のとおりです。

《対象》 「対象がなければ決して認識もありませんし、事物の他に対象もありません。そして、それ故に悟性の人々は、殆ど全ての人ですが、悟性を忘れます。彼らは自分たちの全ての力を対象にくっつけます。労働者が自分の手を決して見詰めないのと同じですが、道具の尖端は見詰めます。それでも悟性を持った労働者たちは真理の中に、事物が姿を現す諸関係について考えることは決してありません。そして、いずれにせよ予備的な諸定義の中に落ち着きます。それらは図面や数字や表象の様に単純化されているとはいえ、常に実際の対象を前提としています。そして内省によって命名が出来る論文によるのでないとするれば、如何なる場合でも決してあなた方は事物の外で観念を把握しないでしょくし、その論文はこの認識のための諸条件に事物の真の認識を示すものです。従って、熟考のための検査とか悟性のための探究はどんなものでも、先ずは何らかの対象の真の認識を前提にしていますし、それは自らに与えなければならない認識です。つまり作り直すことです。《ルクレティウス》 私が実験的考察と呼ぶこの方法の外に、私は考えられる二つの間違いを見ます。その最小のものはデモクリトス（1）やルクレティウスの全作品が想像力である様に、悟性を忘れることです。そして最悪のものは現代の弁証法論者がそうである様に、対象を忘れること、つまり認識そのものを忘れることです。しかし書き取りの授業は勘弁して下さい。自分の仕事なら誰も決して忘れません」

ルブランは言いました、「私が町で夕食を摂る時、そして哲学に関する何らかの話を書く時、実際の知識は何時も仄めかしや要約や博識用制服でもあります。そこでは暗示しか生まれませんし、それは大変に自然です。しかし私が哲学書を書く時、町で夕食を摂る間の話と同じものを抽象的で細切れで短縮されたのと同じ様式に従って再発見します。思考することとは、まさしく要約したり短縮したりすることとされているのでしょく。認識のための奇妙な認識であり、認識になっていないのです」

老人も同意しましたが、身振りで前の話に戻して言いました、「細切れの精神は嘲笑するし、そのことを一般的言語が我々に教えている。それ故に回転された我々の線から、線でも決して全てのものを回転させない別種の交通機関に戻ることにしよう」

《平行線》 私は声に出して思考しました。「つまり移転した線は常に固定された如何なるものも構わないが、共に同一の角度を作らなければなりません」

ルブランは言いました、「それから移転した線を最初の位置と比べるなら、その時は平行線であると言われます」

老人は海を指し示しました、「現実の幾何学に関してはこの明白さで我々は十分である。今は動いているこの事物を見なさい。そして次に、この事物から我々の分かれた二つの運動に戻りなさい。《自然》 角度を変えないのは移転で、角度しか変えないのは回転である。そしてもう一度平面に戻って見なさい。この区別が決して事物の中に無いのは明白であり、それらの事物は説明し難い混乱の中で振れて移動させられるのだ。そして私の考えによると、それは専ら考え出された区別であり、我々の言葉で維持されており、悟性のものである。その代わりにユークリッドの主張は理性のものであり、常に間違い、常

に誓ったことを忘れていて、聴衆の一人のために書かれたものの様に見えるのである。その様にしてユークリッドは少も求めないのだ。しかし兎に角、我々は何でも求める。というのも海を見てくれ、現実は少しもその様に存在しないのである。《第一原理》 回転と移転が現実と違ったものであるのを学ぶことは、直線や数を探すのと同じ様に滑稽である。あるいは、あのアランが何処かで書いていた様に、大空に彗星を探すのと同じ様に赤道を探すことも滑稽である」

ルブランが我慢出来ずに、かっとなって言いました。「私は多くの事物を言いたいと思います。偉大な明晰さがユークリッドやその他の人々の書物の上に降下します。いわば海に舞い戻り、次に全てが確かな方法になっていてすっかり分離されている陸地にまで岸壁によって逃れながら多くの事物が主張するのは、事物はそれらが言っていた様に存在しているのを証明するためであるからです。事物の必然性以外に、事物に従って一点を通る唯一の平行線とは何でしょうか。結局のところ、そこには三という数しかなくても、それらが適用されれば常に同一になるからです。そして、もしも直角も一つでしかないならば、何故この平行線は別々になるのでしょうか。これらのばらばらな要求は、私たちの証拠が自然を強制すること、そして経験が私たちの定義を歪曲するかも知れないと心配するのは単に証拠の欠如であることを齎さないのでしょうか。要するに、もしも私たちの定義があればこれも要求するなら、それを証明することが出来ないことから事物はそこで十分に反論することが認められないのでしょうか」

私はそれを中断して言いました、「事物が反論すると言いますが、事物は言葉を言わないのではないのでしょうか」

《幾何学者たち》 ルブランは答えました、「事物がどんな幾何学も否定するのは明白であり、否定出来る限りは反論することになります」

私は言いました、「それ故に全てが公準として提起されるでしょう。あるいは寧ろ、精神に従って確立されるに違いなく、事物に従うのではないでしょう。そして私は別の年に行った考察を、最後にやっとしかるべき処に置くのを見出しますが、最初は私を悩ませました。それはユークリッドと戦い、この世に沢山の騒音を生んだ逆説好きの幾何学者たちの間のことであり、一方の人々は第一原理を否定しますが、それは唯一の平行線を知るためです。ところがもう一方の人々は美しく正しい定理を否定しますが、それは一本の平行線を導くことが出来るのを知るためです。そして、彼らはそこに相違するものを少しも作りません。その理由を私は良く知っています。相違するものは無いのです」

老人が付け加えて言いました、「それから弁護士が話す様に、全員が弁護を主張するのだ。しかし、もしも事物が我々の網に掛かったならば、それで十分である。何故主張するのだろうか」老人は少しの間考えていました。彼は答えました、「何故だろうか。主張しなければ、細かく分離された諸観念は、その時に事物のもう一つの世界を生むからだ。それらの属性を持っているのだ。その様にして我々の訴訟人は観念の計量器となるのであって、大地の測定器になるのではないのだ。彼らの澄明な世界の中で、何本もの平行線へ行く場所を自問するのである。《移転》 しかし世界は一つしかなく、何本もの平行線は決して一つになって旅をしない。精神はそれらの平行線を守っているのであり、精神が平行線を生んだ様なものである。そして移転は決して回転ではない。オリオン座星雲(1)になる時も回転ではなく、決して回転ではなく、何処にも回転はないのである。というのも、これらの渦巻は泡の最上端にあり、全ての平行線を一緒にねじ曲げるのもまさに十分であるからだ。そして同様に言うに値するのは、星々がそれらの渦巻を上方へ引っ張り上げるための力を調整するために耐えていることである。プラトンが言う様に、木々や岩と結び付けられた大地の子よ！」

《直線》 私は言いました、「引かれた直線は、インクと紙、黒板とチョークから解放されています。しかし、二点間の関係として思考された直線は、三番目の点を考えることがなく、それ故に誰が歪めることが出来たり、如何なる意味で二本にすることになるのでしょうか」

老人は言いました、「同一性であり、それは正確さでもある。等質性であり、それも正確さである。二点間の二直角というのは虚構である。あるいは同じ点からの同じ直線への幾本もの平行線という虚構は、動いたり変形したりするこの世の働きでもある。そして、もしも一本の直線が或る角度に、仮に三〇度に定義されれば、もう一本の直線も一緒に作ることになる。その平面にはこの角度を正確に他の直線と一緒に作る直線が一本以上ある理由も同様に仮定されるだろう」

私は黙っていらませんでした。「線に関する想像力の射撃手であり、それ故に悟性にとっての手掛りである私の内面の敵がそこにおります」

老人は答えて言いました、「我々には現実の事物がなければ、描かれたイメージがなければならない。本当のところは全てが常に一寸した対象の知覚と共にあるのだ。その強制とか必然が対象のものなのだ。その運動は想像力であり、私たちのものである。悟性は結局のところ知覚と想像力の両方を見分けて、我々の手が把握出来ないものを水平線へ、そして性急なこの手の運動を我々自身へ、幾何学的に差し向けるのである。《空間》 そこから空間が広がったりくぼんだりする。空間とは少しも存在せず、空間とは拒絶でしかなく、不在とか足跡であり、予測であり、思考である」

ルブランが言いました、「そうではなくて、この箱は何らかの幾何学概論から免れて空です。しかし私は、それが理解出来る空間であるとは何処の本でも決して読まなかったし、感知出来る空間でもありませんでした。太陽は本当の距離に何を差し向けるのでしょうか。まるで空間が二つあったかの様です」

老人は結論付けて言いました。「寧ろ一つとして同じものは無いと言おう。それは結局、遠いことも近いことも如何なる事物にとっても本質に属するものではないということになる。あそこの船はたった一隻で遠くない。船と私が一緒になるには遠くにある。しかし船と私を私の気に入る様に如何なる陸地も一点として考えるなら、私も考えることは出来る。同じ方法でもしも私が二つの単位を一つの数に集めたいと思うなら、私はそれも出来る。そして、それらを分けたいと思っても、私には出来るのである。《プラトン》 しかし、この世には分けられた単位は無いし、一つの数に結び付いた単位も無い。プラトンが我々の思想を殆ど示して気に入ったのも、その様な考察によっている。しかし、そうではないのだ。寧ろ全ての思想を示すのは我々の思想によってである」

「しかしながら、私はもう一度他の人々の思想に従いましたが、それは戦争で武装されていました。次の様に書いていた愚か者を私は思い出しました。《所有権》 <空間は平面であると今まで信じられていた。空間が曲がっていないのかどうか、今は自問されている。かくして姿の歪んで見える鏡は、我々の自然な顔付を恐ろしくする。感知している懷疑に関する最高法規の元に作られて解体されて作り直されることなく、空間が存在したと一度は信じたのは誰でしょうか。何らかの中国風の面倒な城壁を建てなかったのは誰でしょうか。従って私は何ものでもないこれらの誤りに対して戦争に出掛けたのだ。我々の後に長い我々の影を引きながら、毎晩申し分無く諸関係を持った大洋から、内在と所有権の世界へ進みながら我々は村に戻ったのだ。二つの壁の間にある一本の小道が、我々には案内として役立ったのだ>」(完)

(1) デモクリトス(前四六〇～前三七〇)は、古代ギリシアの哲学者で、原子は絶えず運動し、空虚の場所が前提とされ、それは全ての感覚で捉えられるとした。

(2) オリオン座星雲のオリオンは、ギリシア神話で巨人で美男の狩人であり、女神アルテミスを犯そうとしてサソリに刺されて星座に変身させられた。

第三の対話

その日にルブランは朗々と読むことになりました。

《ゼノン》 ゼノンよ、残酷なゼノンよ、エレアのゼノンよ、
あなたは振動して空を飛ぶ軽やかな矢で
私を突き刺さなかったが、矢は飛んでいないのか

私はルブランに言いました、「この微妙な逆説を月並みな思想に変えるには詩人が必要であったし、稀有なことも必要であったが、それは恐らく一世紀に一度しか起こらないことです」

老画家は絵筆を激しく動かしていました。私たちが彼を発見したのは、空と海に面している一種の岩の部屋の中で、混沌とした騒音が聞こえていました。《色彩》 水平線上の赤い蒸気と、光に焼き尽くされた空と、青い海と、紫色の影は、何か英雄的に彩色された粗描画を誕生させようとしていました。

老人は言いました、「この世界は全く新しく、ギリシアが再び歌っている。しかし、あなた方はお好きな様に討論しなさい。戦いの場は真新しく、未だ荒らされていない。私は審判者でいる。というのも、この絵画というものは思想を望まないからである。色彩は分配されるし、精神は分離されて、時間は停止するからである。存在するものも存在しないものも、自らを映し出して、この世界は我々の思想を拒絶しているのである」

《矢》 私は老人に答えました、「討論することが時宜に叶っているのではないのでしょうか。それなのにどんな討論も行われぬとか、やり直しても行われぬのでしょうか。矢には遠くも近くもないので、比較することがなければ大きくも小さくもありません。そして距離も大きさも決してぴったりと合わせられる服ではないのですから、私たちは運動に関して何と言うのでしょうか。運動は動く事物の中に無くて、寧ろ遠離ったり近づいたりする周りの色々な事物に対することであるとデカルトが指摘した時、デカルトはゼノンに答えていなかったのでしょうか」

ルブランは言いました、「討論しましょう。しかし悟性に関する討論であって、理性に関する討論ではありません。私としては先ず、昨日私たちが時間を費やした幾何学的な運動を考える方が好きです。《運動》 航跡の無い運動です。何故なら回転する角度は決して世界を変えませんでした。何本もの平行線は、無限の速度に従って目に見える世界の彼方で紡いで糸にしていますが、無限とか無とかは意味するものはまさに同じです。しかもそれは一本の直線を生んで、それを保つことさえする二点間の思考された運動でないのでしょうか」私は言うでしょう、「私は何でも考えるので、不変の運動となります。しかし私たちは、直線が色々な点で構成されているかどうか尋ねることはないでしょうし、直線がどれ位の点で構成されているのかも尋ねることはありません。もしもそのことだけを理解したいなら、これらの点は点であることを止めます。それから私は、あなたが昨日言っていた様にアランには恐らく一本の直線を考えるには二点が必要であると言います。というのも、関係の無い位置とは何でしょうか。ところでそれは私たちが不変と思考する運動によっている様に私には見えます。《距離》 空間とは旅程とか軌道のことであり、それは事物が何処かにある軌道によっていることです。距離は、事物を運動に誘っていると言えるかも知れません。遠いも近いも、その事物の中に無く、寧ろ色々な他の事物に対して遠いのであり近いのです。ところで増えたり減ったりする距離を除いて、運動とは何でしょうか。矢は、尖端と羽枝との間の関係に命中することが出来ません。そして私の先生であるあなたが見るのは、私たちの思想が彼の中と同

じ様に私の中でも対立していることです。そこには何でも討論することの真実があります」

私は付け加えて言いました、「そしてプラトンの言葉を信じるならば、パルメニデス（1）も大変良くそのことを知っていました」

老人は色鮮やかなタッチで描いていましたが、立ち上がり、判断力を一点に求めている様でした。その間に老人は、私たちの話を夢見がちに聞いていました。彼は呟きました、「矢が不動であるのは、矢がある処に矢があるからである。矢は他の場所にあり得ないし、自らを乗り越えることも出来ない。アキレスが亀を追い越せなかったのと同じである。しかし、彼が自分自身から抜け出せないのも本当である。彼自身の競走は彼一人のものではないのだ」

……大股でも不動のアキレスよ

老人は彼自身も大股で歩きながら、真新しい砂を踏んで足跡を付けながら、ディオゲネス（2）のやり方で運動を証明したかったのでしょうか。いいえ、そうではありません。彼は絵画的夢想から目覚めていました。

《運動》 老人は言いました、「運動には終わりが無く、又始まりも無い。運動は全てが不可分のものである。そして部分部分が全体である。つまり連続した状態である。私がそれらの連続の状態をさっと見ると、その後では不動になる。それらは次々に続く数の様に続いて行き、一つの状態はもう一つの状態を消し去ることがない。思考されて調査され、描かれて定められたこの運動の外には変化しかないのだ」

私は言いました、「ヒュームのやり方で運動を消すことは何時でも出来ます。言うならば、玉突き玉が台の上を回転する時、一つの状態が常に生まれてもう一つの状態が死ぬことはあり得ますし、蒸気機関車に続く様にして煙が立つのと同じです。しかしその時に私たちは、一つの煙がここで死んで、もう一つの煙があそこで生まれるのであると言います」

《雲》 ルブランが言い足しました、「雲は々私たちを疑った儘にして置きます。というのも、雲が時々船の様に移動するのは本当であるからです。しかしその上良くあることですが、雲が一方では増大し、他方からすり減るとは思えません。ここでは凝結で、あちらでは蒸発です。従って映画のスクリーンの前で私たちは、不動の馬がもう一頭、そしてもう一頭と次々に替えられて行くのを見る時、同一の馬が走っているのだと考えます」

老人は話を遮って言いました、「我々は運動を選択した。運動は決して我々に提示されない。言い換えれば運動とは、変化と同一概念である。そして普遍的な運動という推測は、まさに思考することは何らかのものであることを証明するものである。従って太陽に溶けて消えるこの雲の中で我々は、場所を変えながら同じ水と、分子や原子となって、如何なる目にも見えなかった小部分をもう一度思考するのであるが、我々はお互いにもう少し遠ざかっているのだ。その様な運動はまさに明瞭に推測されるのである。どの様な運動も推測されるのであり、どの様な運動も名状し難い変化が用いられていると正直に言って仕舞おう」

《小球》 私は言いました、「小球がここにありました。今はそこにあります。私はそこに何も見ませんでしたが、私には見えなかったのだと推測します。そして決して消えて無くなったのではなく、決してもう一つ別の小球が現れたのでもないと推測します。私は目に見えない隠された運動を推測します。悟性とは、幻覚の前にある様なものです。その点で私は間違えることにもなります。何故なら、最初の小球を手の中に隠しておいて、タンブラーの中からもう一つ別の小球を私に見せることも出来るからです」

《波》 老人は再び海を指して言いました、「全てが幻覚だ。考え出された最初の運動は殆どが決して正しくない。あなたは岩よりも少し大きな波が走っているのを見ているが、走っている様に見えても波の海水は決して移動していないのだ。寧ろ海水は上がったたり下がったりしているだけだ。ぶら下げたロープを

ゆっくり叩くと、何か走って行く様に見えるが、何も走っていないのだ」

ルブランは言いました、「恐らく間違っただけで推測されているのを私たちの知覚そのもので間違いを直しますが、運動に関する沢山の事例は既に引用する必要はありません。船の乗客たちは陸地が遠ざかって行くのを信じますし、列車の旅行者たちとか他にも似たものは色々あります。今日ではこれまでよりも良く知られている運動に関する相関性は、運動が悟性のものであって事件とか出来事という結果でないことを証明するためには十分です。それというのも、もしも位置とか定められた指示を変えれば動いていたものは停止し、休息していたものは死ぬことが良く分かるからです。そして動くことのない矢が真実になり得ない様に、悟性は自らの幸運をここで取戻します」

《相関性》 老人は言いました、「余りに素早く喝采された相関性が、もしも平凡な混乱を絶頂にまで達しなかったならば、そういうことなのだろう。空間の湾曲はここでは一種の証拠となって騙せないものである。巨大な誤りや形式から内容までの厚かましい航海を通して知らされた私は、同一の秩序による誤りと相対的な運動をその教義そのものに認めたが、その関係が事物に本質的に属することをその誤りは望んでいるのである」

ルブランは答えて言いました、「あゝ、彼らは物理学者たちです。彼らは事物の性質へ向きが変えられて、そのことを同様に長く考えないのです。彼らの仕事は熟考することではないのです」

老人は言いました、「前者の物理学者は事物の性質も知らないのだ。事物そのものと彼のものと分離しなかったし、更に彼のものの中に肉体のものと精神のものも分離しなかったのだ」

《物理学者たち》 再び沈黙が訪れて、老人は絵筆を動かしました。画家の仕事には言葉がありませんし、自分のための言葉さえもありません。何故なら絵画は厳密に言って、外観が全てを満たしていればそれで足りる芸術であるからです。赤い帆を張る船と乗客たちが誰か、私が事物の領域を概念として認識した時、私は十分に現実に接近していると思いますが、私がそこから遠ざかることもあり得るからです。というのも、この船がその時に分離されるからであり、少なくともあり得ることなのです。その代わりに全ての反射像が全体を存在させてくれています。しかし、私は精神以外を働かせることが出来ませんでした。それ故に私は沈黙を破って言いました。

「対象に情熱を混入する誤りに関して言うと、誤りは何世紀も全国に広がり多くの人々を覆い尽くしています。そして人間は至る所でその影と戦っています。しかしながら物理学者は、その誤りにはかなり良く目を離さないでいる様に私には思えます。しかし、悟性の影そのものは、もしその様に言えるとするなら、その上で嘘つきです。《本質》 それというのも私たちは、この世界が創られているのか、あるいは点でも線でも原子でも運動でもないか否かを問いながら、真実から存在へ容易に飛躍するからです。それから私たちがその時に少なくとも考えられる世界で、所謂学校の中でのその世界の本質を除いて把握していたものを知った時、それは現実の状況には少しも近づけませんし、その名前が実在になっているのです。

《実在》 それから私はこの船の名前がマリファナ号であることを知り、そして製油所長によって導かれているのを知っても、通り過ぎる突風の対象として所長が非常に多くの麻布を所有しているかどうか私は結論付けられません。要するに実在には仮定上の必然性以上の別のものがある様に私には思えます」

ルブランは私に尋ねました、「いずれにせよ大変はつきりしているのは、運動も原子も同様に事物の存在ではなく、三角形は三角測量されたフランスにとっての本当の要素ではないということです。私はそのことを固く思っています」

《必然性》 私も繰返して言いました、「決して存在しないものも固く守られるのと同様に、私もそのことを固く思っています。しかし、この世の布地そのものは私たちを大変良く縫い付けていますし、あるいはもっと適切に話すなら、この世の重さとか、舞い戻る航跡とか、私たちが乗せられている現実の航海は、

瘦せていて軽くて空中にある悟性です。無形の概念としては大変に優れていて、私を機械の様にそれに仕上げて描くのが悟性でしょうか。結局のところ本質から存在まで誰がこの飛躍を生むのでしょうか。それとも少しも学者風でない言葉では、諸定理の必然性から私が働いてパンを得る必然性まで如何なる密輸者として私を訪ねるのは誰でしょうか」

老人は絵筆を拭いていました。彼は言いました、「今日はもう何もしない方が良いでしょう。あそこに水平線が見えて来たが、何の色も付いていないそのものの色彩を言うのを知っているのは誰だろうか。待たねばならない」彼は付け加えて言いました、「我が友人たちよ、必然性は二つあるから、その必然性を慎重に話してくれ。一つは、もし我々が良く望むなら定義によって保持するものであり、もう一つは我々が望んでも望まなくても進退窮まらせるものである。《アルキメデス》それは決して人々を溺れさせるアルキメデスの原理ではなく、寧ろ風とか波とか帆とか、その様な場所と時間における或る出会いであることを理解する時間が私になければならなかったのだ。しかしながら、もしも我々が或る定理が我々を溺れさせることが出来ないと理解したなら、それは小さな利益ではない。それ故に精神に従って必然性を精神に導くのは正しいのである。我々が自分の諸観念を再び引受けた時、それらの観念は我々のものであるのを十分に確信するであろう時、世界が現れるであろう」

私は既に、創作過程と絵画から手を引っ込めていた創作者である相手の動作が気に入っていました。しかし事例には何時も注意深いルブランは、船の話に注意した儘でした。

彼は言いました、「定理でしょうか。浮力とは浮かんでいる物体は場所を占めている液体の重さと丁度等しい、ということが定理なのでしょうか」

《液体》 私は言いました、「私たちが十分に考えたなら、それは定理に違いありません。何故なら、少なくとも均衡に圧力をかける液体を仮定して下さい。その液体の各部分は他の液体に浮いています。それは液体の重さに応じて支えられます。私たちが軽いとか重いというのは、浮いている事物は本質的に属すると考えることを保ちさえすればあらゆる方向における、全ての圧力を分析すれば良いのです。しかしそのことは私たちが常に学ばなければならないことであり、決して十分に知ることはないでしょう」

ルブランは付け加えて言いました、「その上、均衡している液体は決してありません。もしも海が岩や空気や月や太陽に対して浮かんでいなかったなら、この海は決して現実的なものではないかも知れません」

私は答えました、「しかし、アルキメデスの原理は一つの単純な関係であり、関連してそれと比べれば実際の遭難が判断されます」

「あるいはその上救助もある」と彼は言うのでしょうか。

老人は言いました、「以上は良き小学生たちの話だ。我々の物理学者たちが思考するものとは、あなた方も同様にアルキメデスの原理が過っていないことを恐れず、二本の平行線がお互いに交わる様になることだけを恐れるのだ。そして誰も別な風に考えないのだ。しかし、考えることを自覚するのは決して容易ではない。従って我々は、恐らく運動から始まって圧力までの我々の思想を余りに早く導いて仕舞ったのだ」

《能力》 ルブランは言いました、「あゝ、私たちには能力が欠けています。しかし、あなたは一続きの慣性や変化のない運動や速度や加速度に従って、その概念をきれいにすることを私に教えました。厳密にはこれらの理論的構築は、デカルトの秩序に適合していて、それと同じ方法での真実でもあり、まさに直線や、角の点と同様の現実のものでもあります。それどころか、これらの直線や角の二つの連続の間に、ここでは悟性はその裡にあるのを確信させる驚嘆すべき一致を発見するのも容易です」

《デカルト》 老人は言いました、「もしも我々が要約して言いたいなら、デカルトという規範に支えられたこれら全ての構築を、精神に従って真理を命名するだろう」

私は遮って言いました、「私たちはデカルトを引用しない様に決心しました」

老人は言いました、「その通りである。しかしデカルトは有名な法則や完全な諸連続に専念して、秩序に

よって構成されていても作っては壊すものであり、その外観には既に思い上がりは無く、その根底には決して観念で世界を作ることにはなかったのである。少なくとも彼は精神に秩序を作り、そして彼自身に与えている。だが、少しもこの道に従わなかった者は推測することがなくなり、仮定することも出来ないのである」

私は付け加えて言いました、「そして、その考察は非常に卓越した精神が理由も無く何でもかき混ぜて仕舞った熟考という畑に、何らかの光を投じているに違いありません。何故なら、まさに吟味されることがなくても精神の見る処では信頼の置ける仮説が幾つもあるからです。《観念》そして他のものもありますが、それはまさに検証されたものであり、精神の名に相応しくありません。勿論、私たちは要約して言いたくありません」

老人は答えました、「それ故に我々はこれらの完全な連続をもっと身近に考えなければならない。そこでは対象が形式の法則に倣って作られるが、それは一連の整数の様なものであり、足し算や掛け算や累乗による数列、幾何学的数列、直線、平行線、角、円、力学的数列、一定の運動、速度、加速度等々の様なものである。少なくともその様にして、平面の丈夫な形状の美術館とか、数の一覧表の様なものが生まれる対象を見詰めないで、我々は観念そのものを注意しなければならない。その観念は一つの言葉から他の言葉へ移行される不変の関係になり、それらの形状の相違の中で同一のものを認めるのである。しかし我々は次のことを十分に注意しなければならないのだろうか」

「何をですか」とルブランは尋ねました。

《数えること》 「素描や文書によってしかここでは存在しない対象は、それらの中に本質があるのであり、我々の情動を説明するものであって、それらの情動を遍歴して、その前と後との関連から一つの席順を与えていますが、精神の運動との関係は無いのです。従って数えることも色々あって区別しなければなりません。例えば、多数のものの調査は色々な事物の本質に関する探究です。正確に言うなら色々な事物への適用としての一連の数に関する調査です」

ルブランは一握りの砂を手を持ちました。彼は言いました、「それというのも、試しに私がここで握っている砂の粒がどれ程の数になるのか数えてみても、その数そのものの認識は少しもありませんし、私がそれを真理として認識出来るのは、完全な連続においていわば前になり後にもなるからです」

私は付け加えて言いました、「数は第一に事実ではありません。ところが多数が事実になるのは寧ろ数によるのではないのでしょうか」

《砂》 老人は言いました、「あなたの手の中の多数の砂の粒は出来事でしかない。或る粒は流れるし、風も運んで行く。しかしプラトンと共にもっと正確に言いたいと思うが、これらの粒が何らかの原因で寄せ集められると、複数になることが出来ないのである。二つの部分になることは三つにも四つにもなり、そのことは一粒の性質のものではなくなるのだ。数とは、それらのものを一緒に理解するものであり、一つ一つのものではないのだ」

ルブランは遮って言いました、「でも、それでは未だ余り言っていることになりません。もしも分離したいなら三角形を壊して作り直さなければならない様に、そして常に取上げられる三角形の事物から観念を引離す様に、恐らくあらゆる方法で四の数も構成しなければなりません。もしも四の数を助けたいなら、三から各々の二へ粒を移行させることであり、三及び一として全ての粒を一緒に認識することです。次に二及び二として、次に一及び三として認識することです。何故なら、これらの粒に四を預けたいなら、それは金庫に預ける様な方法になるからです。砂の粒を風や水に預けることになります」

老人は答えました、「風や水では何も証明しない。四とは、完全な連続においては三の次に来るものである。そして悟性であるのが見分けられるのは、この完全な連続をやり直すことである」

《航跡》 私は言いました、「これらの指摘を、作られた運動の連続に適用することを私に委ねてください。ほら、船の航跡が、風によって高くなった波を横切っています。ある時は上がったたり下がったりする運動

が付け加わり、ある時はそれらの運動がお互いに妨げ合います。そして、これは重要な観察ですが、私は各々の水滴が決して一つの運動しか行っていないで各瞬間には一つの位置にしかないものとしてヘルムホルツ (3) において発見したのです。しかしながら、それは半分の真実でしかありません。というのも、水滴には運動もなければ位置もないと私たちが言った時、私たちには気に入ったその様な運動や位置において、好きな時に水滴を把握することは楽な気分させてくれるからです。《軸》 水滴は、太陽の周りを回り、月の方向へ高くなり、持ち上げられ、落下し、渦巻の中で回転します。しかし結局のところ水滴は水滴でしかありません。それ故に水滴自体においては如何なる方法でも動き回れる訳ではないのです。ゼノンの矢と同じです」

ルブランは遮って言いました、「水滴は決して全体のものではないことを考えていません」

老人は言いました、「それは一つの事物にとっての手掛りになる考えである。しかし我々は長方形の軸について理解している別々の二つの運動を、直接でない運動の代わりに用いることがあるのだろうか。これ以上に単純なものは何も無いし、少しは学識のあるどんな人も熟考しない限りはこの分析方法を信用しているのだ。それでも熟考するや否や、玉突きの玉とかボールとか砲弾が実際にこの二つの運動を行うかどうか尋ねることに変わりないのである。悟性はここでは自分の部分部分にしか答えないので」

《ゼノン》 私は遮って言いました、「言わねばならないことはゼノンの〈厳しき〉ですが、ゼノンは〈親切な人〉でもあります。何故なら、何世紀も越えて無敵である彼は、絶えず悟性を救っているからです」

老人は言いました、「それらの観念は、それらの誕生のための観念でしかない。この世界が思考するのを否定することに人は疲れているのだ。魂の中に矢が加入し得る全ての関係を仮定しながら、魂を矢に委ねているのだ」

私はホメロスを引用しました、「矢は血を渴望する……」

ルブランは私を遮って言いました、「私たちが同様に考えるのは、私たちには矢の運動が矢にある限り、矢は空間と力強い突進と物神崇拜の色々な他の思想を渴望するということです」

老人は答えました、「神秘の隠された特性だ。そうだ、動きの中の力強さであり、重い事物の重さであり、その点の位置である。これらの実例は阿片による眠気を誘う効力よりももっと良いものである。そして点とは、点自体よっての位置でないとするれば、直線とは何であろうか。直線とは直線自体よっての方向を定めることでないとするれば、角度とは何であろうか。悟性が悟性であるのは、その内属を拒絶することによるものである」

《原子》 私は言いました、「そして、そのことは十分に原子を定義しています。何故なら、原子は関係による以外の何ものでもないからです。幾何学以後に言えるのは、人間の精神のどんな努力も原子が事物であるのを拒絶することにあります。しかし私たちは言葉を濫用しなかったのでしょうか。そして大変に美しい場所の中で私たちを維持するために何を利用しているのでしょうか」美しい夕空が近づきました。海全体が銀一色になって、薄紫色の炎を映し始め、ルブランは腕を差し出しました。彼は言いました、「私たちの話を海は嘲笑しています」

老人が言ったことです、「我々の話を嘲笑しようが、どんな話も嘲笑しようが、同じことだ。私たちがそのことを思考する様に導くには、やはりこの上なく緻密な話にしなければならないのも同じことだ。《宇宙》 何故なら、それは精神が精神自体へ逃れて最後に自らを発見する時であるからで、単に剥き出しの宇宙が現れる時でもあるからだ。本質から存在へ飛躍することは出来ない。更に、考えられるどんな英知も、絶えずこの飛躍を拒絶することに存するのだ。反対に、常にどんな存在も本質によるのではなく、どんな本質も存在によることを否定して、我々は存在とは何であるのかを知る様になるのだ」

そして直ぐに私は、常にやり直さなければならないこの偉大な分離について夢を見始めました。何故なら宇宙が望んだり望まなかったり、脅したり許したりすると仮定することは、私たちの変わらない狂気で

もあるからです。私たちが犬とか猫のことを思考したものは、どんなものでも拒むことに決して同意しません。それなのに酪酊した人とか苛立った人のことを思考したものは、どんなものでも拒むのが私たちの義務であるのは明白です。材料は豊富にあります。しかし、全てのものが混合されている人間たちの世界に戻らなければなりません。そこでは睡眠のために全てのものが混合されています。人間たちの世界では身を守るのは大変に上手ですが、教えるのは大変に下手なのです。(完)

- (1) パルメニデス（前五一五頃～前四四〇頃）は古代ギリシアの哲学者で、エレア学派の祖であり存在論の父と言われる。
- (2) デイオゲネス（前四一三～前三二三又は三二七）は、古代ギリシアの哲学者でキニク派の代表者である。
- (3) ヘルムホルツ（一八二一～一八九四）は、ドイツの物理学者・生理学者である。

第四の対話

《仕事場》 雨と風です。私たちは仕事場を隠れ家にしてはいますが、そこではミューズ（女神）があらゆる事物を用意していました。灰色の空はどんよりしている様に見えます。しかし世界のどんな明るさも、ガラス状の屋根から降ります。驚くべき対照です。そして、あらゆる事物が人間の肉体から生み出されたこの閉じた場所で、私たちは他の色々な思想について行ったことが見抜けられます。ルブランは昨日の私たちの話に満足していない様に見えました。

彼は言いました、「私たちは町での夕食の間に再び話したことと別のことを考えなかったので、私は大変心配です。私たちは、対象から非常に近い処に止まらなくてはならないと良く言いました。しかし、そのことを言うよりも行う方が良いのです。私はそれ故に釘を示したのであり、悟性が釘以外に何かを私に言うのを是非とも必要としています」

《ソルボンヌ》 私はその時、木製のねじ釘をポケットから取り出しました。私は彼に反論しました、「ほら、全然釘ではない、もう一つの釘です。それが私に思い出させるのは、私ができる限りやってみようとした学位論文を考えていた時代に、次の見事な表題を見付けました。「釘とねじ釘」です。しかし私はソルボンヌ大学の人々の称賛を全然気にかけないばかりでなく、彼らが私の職人思想を真面目に受取るのを少しも願いませんでした。もしも私がプラトンの『パイドン』を翻訳していたなら、少なくとも一頁に二つは誤訳しながらも、私の流儀を最良のものとして認めたことでしょう」

老人は言いました、「私は最も見事な表題を見付けた。「滑車とロープの分岐点についての考察」である。一つの観念を形づくるのは何であるのかを理解させてくれる機会である様に私には見えたのだ。《装置》

それというのも、実を言うと一つの分岐点はさらさらしていて巻揚機に備え付けられた一種の滑車でしかないからだ。そして私は革製の帯には私の絵画の荷物を締め付けてあるが、同様に大変に小さな滑車でしかないのだ。すると立派な仕事をする全ての分岐点において私の精神に現れたのは、一つの切れ端に対する二つの切れ端の対立に戻らなければならないことである。それは結局のところ同一の力に対する踏破した道とその緊張の不平等であり、分岐点を引っ張れば引っ張る程、分岐点は締め付けられることになる。私自身もこれらの分岐点においての悟性を理解しようと思った。しかし、それは私の狙いの一部でしかなかったのだ。何故なら、これらの装置は人間と同じ位に古くからあるものであり、可能性に従って言葉が無くても行為そのもので発明されたので、その技術を私の分岐点においても締め付けるつもりであったからだ。この思想には言葉が無く、熟考も無く、確信があるだけである。修行期間も同じであり、無言で臆病で習慣で信心深いこの模倣は、事物と人間の顔を見詰めることにある。《仕事》 そこには二重の恐れがある。決してデカルトの秩序ではないが、それは何かがある一つの秩序の源泉である。というのも一揃いや一組の道具は、プルドンが推測した様に、仕事の理論を内包しているからだ。だから私はあなたよりも少しは流行を知っているからね」と老人は私に言いました。しかし、私たちは昨日よりも今日の方が更にもっと退屈していると、私はミューズに話しかけながら付け加えて言った様に思えます。

ミューズは答えました、「悟性の働きは、私には時々単調の様に思えたのを認めます。定義も計算も砂漠の様です。その短い一生を何故その様に送るのでしょうか。しかし諸観念は探検者の道具でしかなく、世界は道具によってこれから現れようとしていることを、今度は私が約束します。それは絵画の背景の様なもので、私たちはそこに近づいているのを私は感じます。結局のところ頭は独りで進みません」

私は言いました、「女性が自分自身の肉体から引離した儘でいるのは、少しも容易ではありません。女性がそれにより良く耐えるのは次のとおりです。下の者は一段と高くされて欲求も高められます。ミネル

ヴァはジュピターの頭から抜け出しました。しかし、それが起きたのは一回だけでした。芸術家になりたいと思う人々を私が理解するのは、分離された頭にとっては偉大な意見であり偉大な忠告であると私は考えるためです」

老人は言いました、「この長椅子は男性用の形をしている。この肘掛椅子も同じだ」

《井戸》 ルブランは言いました、「ガラス戸から見える庭も同じです。それからこの美しい井戸でさえも、水を汲む一人の女性の掌においては彫像の様です。全てのものの高さや長さは人間の肉体に釣り合っています。木々も柵も花々も全てのものが人間のためにあり、人間に合わせています。それは海と同じではありません。海は、人間が最早存在しなくなっても、まさに変わらずに今と同一のものに違いありません」

私は付け加えて言いました、「這い上がる人間の痕跡が無いならば、階段とは何になるのでしょうか。その上、辛うじて見えるが所々草に覆われている農民の簡素な道は大変感動的で、そして半分消えているとはいえ、すらすらと読める文章と同じではないでしょうか」

《痕跡》 老人が言いました、「人間の足跡は既に一種の彫像であるが、あなたが井戸とは何かを良く言った様に、その窪みは道具の柄と同じ様なものであり、あるいは手の形をしたユリシーズの弓の部分でもあるのだ。最も古い芸術は、人が見た儘の人間のイメージというよりも寧ろ人間の痕跡である。この不在は間近に迫った存在でもあるし、人間のこの窪みは数々の機構には特有の雄弁でもある」

私は言いました、「ヘロドトスは、バビロンの塔には聖なる部屋があったが、目に見える如何なる神もないことを語っています。もしも彼の対象そのものが何ものでもないと言えるとするなら、あなたはその時想像力が部屋の前で見付けた様に見えないのでしょうか。そして時々私に考えさせたことは、模様が先ずその様な対象とか、もう一つ別の対象の写しであるよりも寧ろサインの様なものになるということです。それ故にどんな模様も、そしてどんな絵画も私たちにとっては既に神秘的な意味があります。あるいは私たちを感動させられるものは何もありません。 《装飾》 装飾は良く隠されていますが、あらゆる芸術の模倣にとっては最高の規範です」

老人は尋ねました、「何があるのだろうか。詩も同じだろうか」ところが彼自身が答えました、「詩も明らかだ。何故なら、リズムと音の繰返しは人間以外に如何なる事物にも似ていない人間としてのサインであるからだ。そして、もしもこの純粋な装飾が最高のものでなく、叙述する言葉を支配していなかったなら、単なる作詩法である。詩は人間の呼びかけである」

私は付け加えました、「そうです、足の呼びかけです。一步以上の感動とは何があるのでしょうか」

ルブランはその点について私に言いました、「私はあなたが美学研究に再び飛び込むのを私自身協力しました。そして私は全く新しい何本もの小道をここに見ますが、それらの小道はあなたが既に線を引いた千通りもの小道を検証するでしょう。しかし釘とねじ釘と滑車が私たちを待っています。私たちは誓いました。あるいは少なくとも裸の悟性と裸のその対象を一緒に発見することを私は誓いました」

女神は微笑していました。女神は言いました、「秩序のことを集めて一つにした言葉はないのでしょうか」

老人は答えました、「反対に、我々を支えているのが秩序の様に思える。一つならず多くの秩序があるのは本当だ。次のとおり人間味のある秩序とか政治的秩序である。デカルトの秩序は自然により近いものである。神々を支える事物の秩序は恐らく、音楽を否定する水滴の騒音を私たちに聞かせる様に純粋な無秩序である。ところで、それは音楽を否定するが、呼び寄せるものでもある。 《女性》 しかし私たちは何を望んでいたのだろうか。少なくともこの窪みの秩序を通りながら叙述することの女性の帝国とは、そしてそれらの思想の中心とは誰であろうか。彼女は待つこと以外に何をしようか。男性を待つこと、子供を待つことである。窪地を人間の姿に救い出すことだ。ところでこの貴重な思想は、女性とは反対の男性の思想をよく定めているものである。だが、家の外にあるものは決して人間の形をとっていない。屋根は雨に備えてあるのだ。事物は事物に備えるのである。樋は水の流れに従って作られているのだ」

《雨水落とし》 私は遮って言いました、「雨水落としの怪奇な像たちは、危険な状態にある人間の姿です」

「しかし、それが悟性ではないのでしょうか」とルブランは言いました。

老人が言いました、「悟性は全ての神々に対して独りである。絶えず人間を消しているのだ。我々の三角形においては人間のしるしがある様に、悟性は少なくとも決して人間に依存しないものを望んでいるのである。そして、もしも私たちを発見する必然性以外に他の必然性から分離されれば、この抽象的な必然性は少しも意味が無いのである。勿論、そのこと自体は抽象的である。幾つもの事例が是非とも必要である」

ルブランは言いました、「それは、あなたが繰返し言っていることでしたね」

《釘》 老人は答えました、「それでは一本の釘とは何であろうか」老人は釘を手を持ち、打とうとする様にして釘に尋ねました。

「君は固い。釘の長所は力で物の形を変えることではない。平らな頭部の上への力がどうであろうと、もしも君が少しも物の形を変えなかったなら、君は完璧に違いない」

ルブランは言いました、「私にもやらせて下さい。木材は金槌よりも少しも固くないという考えを先ず無視しなければなりません」

私はそれを遮って言いました、「コントが言った様に、隠れた性質は少なくとも結果によって決められます」

ルブランは再び言いました、「それじゃあ、金槌で木材を叩きましょう。金槌と釘の頭部の表面が、お互いに合致する様に、上手く真っ直ぐに叩きましょう」

老人は言いました、「これらの表面が完全に平らで、釘も完全に固いと仮定したなら、釘の尖端では何が起きるのだろうか」

《表面》 相手は再び言いました、「釘の尖端は、その頭部と比較すれば小さな表面でしかなく、百倍小さいということにして置きましょう。頭部全体の表面で耐えるのが二〇キログラムの応力という数値にしましょう。この表面の百分の一は、ここでは百分の一の応力にはしか耐えないのですが、明白ではありません。釘の尖端は頭部の百分の一に等しいのに、釘の全応力を弱い木材の表面上に集めます。これら二つの応力の表面においては

全てが等しいと仮定しましょう。壊れる表面は釘の尖端と向かい合っているものです。従って釘は、その形状によって強固な機構になります。広い表面に一つの衝撃を受けて、比較して非常に小さな表面にそれを集めるのです」

老人は言いました、「それから、いわば我々には決して分からないことであるが、木材の分裂も起こり得るし、我々は金槌においても板においても等しいと仮定しながら、この耐久力を消去するのだ。そして我々は形状しか考えないだろう」

《固さ》 私は付け加えて言いました、「単に突き刺すことを意味する尖端のこの考えを既に打消して、私たちは数々の表面との関係によってその考えを取替えます。隠れた特性の様に次のことが残されるだけです。先ずは釘が木材よりも非常に固いことであり、次に金槌と板は同様に固いのです。それだけでも既に大したものです」

老人は言いました、「待ちなさい。我々は数々の表面の評価によって木材の変形に関して計算された数値に至るが、それは固さが両方とも等しい前提においてである。つまり金槌の頭部の跡は、板の上の釘の尖端の跡よりも百倍浅いものでなくてはならないだろう。そこには対等の固さに関する一種の定義が無いではないか。そして計算された数値と測定された数値の差異は、もしも固さが等しくないなら、固さを測定する機会を与えないのだろうか」

私は老人に答えて言いました、「そうです。釘の固さは他の両者の関係からも著しく、どんな変形も測定出来るものが無いために、固さは決められないのではないのでしょうか」 《平等》 老人が続けて言いまし

た、「かくして一定した関係が他の色々な測定を導くのであり、平等が不平等から判断されるのだ。色々な観念のこの試みが、あらゆる種類の研究において自ら同じものを非常に感受するので、私はその点について詭弁を弄する必要は無いと思っている。その代わりに私はそれらの平面の表面に満足していないし、私たちはそれを平面でないものの代わりに用いているのである。顕微鏡で見える尖端と頭部を仮定しなさい。それらの尖端と稜と縁と共に鉄分を含んだ岩場の景観に見えるに違いない」

私は遮って言いました、「私は実際の畑の境界になるものを々自問しました。というのも、測量士が境界線を引く紐でさえも、一匹の蟻の目や脚には酷く変化した一連の小さな谷にしるしを付ける様なものでしょう」

ルブランは言いました、「その紐そのものは、ざらざらとしたでこぼこの物体でしかないのです」

老人は付け加えて言いました、「そして我々は不均衡と呼び、直線でないものを起伏の多いでこぼこした曲がったものと呼ぶのである。ここでは分離している二つの言葉が認められる。定義と、自然に適さないものを知るべきである。私にとって精神とは色々な相違点を探究するのを決して終わりにしないものの様に思えるのだ。従ってゼノンの矢も、もしもゼノンが先ず終わりにしなければ、深淵上に架かる橋の様に直線をぴんと張りながら、同様に前進しなかったのだ。要するに我々は何時でも何処でも三角形分割しているのである」

私は言いました、「私たちは色々な多様性に従って直線を曲げることを十分に用心しているが、それは空間の認識の秩序が常に事物に先行して、事物が空間で並ぶことは決してないという意味でもあります。《身元保証書》 何故なら、私たちには素晴らしい三角形分割があるからです。私たちの三角形は蟻や虫けらに見合って増大されたものでさえあり、虫けらから虫けらが増大するのと同じで、私たちが事物の証明書を作成するのに対しての身元保証書に過ぎないでしょう。しかし私たちには有益である限り正確さを推し進めますが、嘗ては私たちの形式が真実であると言われ得る程です。でも、形式は決して内容と等しくありません。それに反して、もう一度言いますが、相違は不変のものによってしか決して表現出来ません」

老人が付け加えて言いました、「そして、どんなに光沢があってもざらざらしているのである。しかし私は、絶対的な光沢とか存在しない平面を言っているのだ。その様にして事物への幾何学の応用は恣意的ではない。我々は先ず終わりにするし、或る意味で全体が部分の前にあることを発見する者は、悟性も発見するのである」

「決してそうではありません」私は、自然に適用した方法の様に、自然と同様に与えられて最初は自然にぴったりくつつき、そして自然と共に編まれていた様に言いました。《ティマイオス》 「プラトンが言いたかったことですが、恐らく彼が『ティマイオス』の中で告げたかった時に、もしも諸事物の最終的な本質が発見されたなら、小さな三角形のものになるに違いないということです。しかしながら私の意見では、その時にプラトンは〈神〉の概念を発展させたというよりも寧ろ、世界の概念を発展させたのです。それはプラトンがここで神話によって更に話すことであり、精神によって発見可能なもの全てを述べることです。数える概念は除かれますし、自然は精神でないのを知るべきです。その上、私は一致したしるしに基づいて精神が王を生んだ故に、故意にそのことを行うのを納得させられます。しかし私たちは労働者であり、形式の仕事が下手な者たちです」

《尊敬》 老人は言いました、「悟性は何も尊敬しないので軽蔑されるのだ。しかし、我々は釘について十分に言っただろうか」

私は老人に答えました、「もしも私たちが、観念はどの様な意味でも事物に適用されたり適用されないことを示したいならば、恐らく十分に言いました」

ルブランはネジ釘を調べていました。そして老人に話しました、「釘は平行移動するものです。ここにあるネジ釘は回転しますが、寧ろ回転して平行移動します。このネジ釘の表面は固く斜めになっていて、私

の力は方向を変えます。ここでは私はネジ釘が回転しながら嵌まり込む道をより長く作ります」

《巻揚機》 私はルブランに言いました、「同様に私も、回転する全ての機械の様に、力を強めます。これは仕事の法則であり、樽の代わりにバケツの水を次々に運ぶ時、一回の力は小さくて済みますが、運ぶ距離は長くなります。空のバケツを持って戻るのを無視するなら、二〇倍の長さに対して力は厳密には、まさに二〇倍以下になります。大変に単純なこの法則は、巻揚機や梶子や複滑車の様なあらゆる回転する機械の原理を説明しています。そこで動く事物は、それを直接引きずる事物よりも速く動きません」

老人は付け加えて言いました、「この力は回転する機械の中にしか見られないと私には思える。というのも、平行移動のみによると如何なる角度も変化しないし、固体の全ての部分も同様の距離を動き回るからである」

《ピストン》 ルブランは遮って言いました、「注意して下さい。あなたは閉じ込められた液体とピストンの圧力を忘れています。何故なら圧力においては小さなピストンでも大道を動き回りますので、あなたが幅の広いピストンを移動し得るのもほんの一ミリメートルだけのことも同様に起こるからです。その上、水が圧力を伝える限り、あなたが言った様に仕事の法則は、応力による距離から生むのは常に同一の応力になりますので、直ぐに応用されます。例えば一メートルも幅に対しては一キログラムの応力になり、一ミリメートルに対しては千キログラムの応力になるのです」

老人は言いました、「あなたの言う水圧は、我々が言う釘と殆ど反対であると私には思える。それというのも我々が言う釘においては、先ず釘の大きな表面上で分けられた圧力が大変に小さな表面上全体に集められるからだ。もしも我々の釘が、液体で少なくとも固い外観の中に維持されていたとするなら、そしてもしも私が釘の頭部上にピストンを設けて、もう一方の尖端にも別のピストンを設けたならば、尖端には金槌の衝撃によって部分的な一センチメートルの力しか伝わらないだろう」

《固体》 私は言いました、「そしてこの指摘は、固体の定義と液体の定義を満足させるのに適しています。その上、そこには最早液体も固体もなく、圧力も力も表面もなく、線もありません。岩と比較できる色々な固体は、十分な圧力の下で沈むことが語られます」

ルブランが付け加えて言いました、「何時でも関係です。事物はそれ自体は固体ではありませんが、隣接する事物との関係から固体になっているのです」

老人は答えました、「しかし、もしも我々が普遍的言い方に戻るなら、我々が良く言えることは、水圧機においてはやはり方向である。つまり応力の角度が変わるのは、正常の場合にはどんな壁にも応力が行使されるからである」

ルブランが言いました、「あゝ、しかしそれは正常な場合でしょうか。銅とか鉄の壁なら決して正常ではないのですから、それは検査すべきでしょう」

《法則》 老人は答えました、「私もまさにその様に理解するし、我々の言うネジ釘はこの奇妙な提案に我々を立ち戻らせる。その提案とは、表面に対して取るに足りない応力がこの表面では正常に数えなければならぬことである」

私は付け加えて言いました、「如何にして別な風に数えるのでしょうか」

ルブランが言いました、「それ自体で分析するのです。しかし注意すべきことと私に見えるのは、私たちが引用した機械においては、発見され得る類似の機械の様に、その分析が役に立たないことです。何故なら機械が自ら動かないこと、つまり人が相手に提供する仕事しか僅かに生産することしか出来ないと仮定すると、私は行使された応力と動き回った道の間には何時も同じ逆の関係を持つでしょう。そこには観念とか法則が無いのでしょうか。お好きに言って下さい」

老人は答えました、「まあ、いいだろう。しかし色々な事物の共通観念が、各観念に適さないというこの奇妙な偏見に倣って、私は決してその偏見から抜け出すことが出来なかった。この種の観念は私が見た処

では、実行のために要約されたものに過ぎず、要するに計算行為に過ぎないのだ。各機械にとってのやり方は、以上のとおり私には興味があるものだ。しかしながら人が行う習慣以上にそれらの観念には、別の相違は多分ここに無いのである。というのも実地家は常に普遍的な公式へ行くからである。その公式は真実と名付けられていて、有益な意味もあるからだ。その代わりに理論家には熟考する人の意味もある。事物の側から自分の観念を推し進めて、可能な限り事物を表すのである。それではネジ釘の話に戻ろう。ところでネジ釘が木材に対して応力を行使する日に身を置く様に、私は登って行く馬車と比べたいと思う」

《坂》 私は言いました、「そうです、馬車が悟性の妨げにならない様に想像力を少し手助けするために、私はまさに円錐形の山で、その周りを回って頂上まで登っている坂道を仮定したいと思います。そこにネジ釘はあるでしょうか」

ルブランが付け加えて言いました、「そして、馬車は雌ネジと同じで、ネジ釘の長さをよじ登るのですね」
老人は答えました、「そうである。しかし、この比喩は少し動物を楽しませても、この渦巻いている道を巻き戻らなければならないのだ。何故なら道が渦巻いていてもいなくても、大して重要なことではないからだ。我々はこの著しい回転から離れなければならない、取分け我々には重要な別の種類の角度に拘らなければならないのだ。そして、そこでの我々は傾いた平面にいるのである。更にもっと考えなければならないのは、道とか馬車が推し進められるのは少しも重要ではないことである。というのもネジ釘において、雄ネジである馬車は固定されていて、歩いて進むのは雌ネジである道の方であるからだ。勿論、これらの奇妙な変更は何も変えないし、もしも精神における関係としての運動の正しい観念を守っているとしても、決して驚きはしないだろう」

《道》 ルブランは付け加えて言いました、「道によって持ち上がる馬車が、垂直にしか動かない様にしっかり止められているのが条件です」

私は言いました、「そして実際に、基本的なネジ釘は物と物とを繋ぐ楔です」

老人が遮って言いました、「余りに性急である。楔は道の水平運動によって馬車を垂直に移動させる。ネジ釘において傾いた道は、動かない馬車にぶつかりに来て、水平に押されるに応じて垂直に下ることを理解しなさい。この運動は、傾いた平面と堅固な支えを介して直角に向きが変わったのである。見なさい、まさにそういうことである。ドライバーは側面に回すことで、ネジ釘は深く入り込むのだ」

ルブランは言いました、「方向の変化にとっては正しいのですが、道具に行使される力と、最終的に木材に伝えられる力の関係も正しいのでしょうか」

《馬車》 老人は言いました、「馬車と傾いた平面に戻らなければならない。そして、どんな機械の秘密にもある傾斜を、変化させなければならないのだ」

ルブランは遮って言いました、「もしも平面が垂直になったなら、私は井戸のバケツを引っ張り上げる様に、馬車を引っ張り上げなければなりません。道はもっと短く、力はもっと大きくなります」

今度は私が言いました、「もしも平面が水平であれば、私は持ち上げる必要が何も無いのです。私は道路を克服しなければならないだけです。歩き回る小道は無限で、如何なる力もありません」

老人は言いました、「小道と力の二つの間で、我々の機械の能率を自ら見出すことである。しかし何でも解決する公式は放って置こう。私は傾いた平面に対して子供の馬車を押す。何が起こるのであろうか」

ルブランは遮って言いました、「色々な恐ろしいことです。車輪はすり減り、全体は砕かれ、表面には溝が掘られます。風景は蟻たちでも変えられます。馬車はぶつかり、粉々になり、上がり、そして下がります。災難の連続です」

《平面》 老人は答えて言いました、「大変によろしい。しかし私は完全に平坦で固い私の完全な平面を斜めに広げて張るのだ。私は水平に押すと仮定しよう。私の馬車は壁にぶつかる様にして、そこでぶつかるのである。しかし垂直に馬車は動くことが出来る。もしも平面には階段があったなら、私は上がらなけ

ればならないだろうし、そして押し進め、次には更に上がらなければならないだろう。しかし私の平面には決して階段がないのである。そのことは奇妙な障害を生んでいる。私は押し進み、平面は重荷を上げるのだ。その接触で何が起きるのだろうか」

私は平面とは何か、そして平面が出来ることを言いました、「見なければなりません。何故なら、あなたは水平の運動で障害を生むことを言ったからです。しかし、そのことは決して意味のないことです。実際にそんなことはないのです」

老人は言いました、「私は既に見出された真理を発見するために多くの時間を過ごした。しかし、発明者たちのあらゆる間違った論理を創り直したことから未だ私はまさに遠くにいる。《常態》 悟性を人は求めるが、そこに悟性があるのだ。悟性を見出す処に悟性は失われる。しかし我々は今は正しい観念の処にいて、平面に対して直接ぶつかるもの以外は障害にならないということだ。その様にして私の水平の力は、二つのものにおいて分解されなければならない。一つは、平面に対してぶつかるもので、少し傾斜している平面にとっては力を小さくするものである。もう一つは、平面に平行しているもので、平面によって妨げられる如何なる方法もないものである。実際どんな意味でも私は傾斜した平面にはぶつかるし、どんな意味でなくてもぶつかる様になるのである」

私は言いました、「デカルトが有名な定理で、平面に投げられて彼に戻る反射を説明したのもそこからです。しかし、あなたの仕事のこの部分は、ここでは私たちには興味がありません。それは残りの余分な部分であり、興味があるのは傾いた平面と平行した馬車を移動させる部分のものです」

《力》 ルブランは言いました、「やり直しです。この移動の中で考えるのです。二つの移動です。一つは水平のもので、もしも私たちが思うことは高さを稼ぐのを目的とするなら、直接的には役に立たないものです。もう一つは垂直のもので、平面の傾きが小さければそれだけ益々相対的に水平に近くなるのが私には分かります。私たちは自分たちの本当の進路上にごく僅かな小道を作りましたが、無用の進路上には沢山作りしました。しかしそれに反して、私たちの力は反比例して直接引っ張り上げるための力に向かいます。つまり相対的に引っ張り上げる力が小さくなれば、それだけ益々傾斜も弱くなります。かくしてネジ釘の周りの進路も、木材に対して斜めに差し込みながら多くの小道を作りました。その尖端は、非常に小道が少ないのですが、その時はあなたがネジ釘を回転させるために使用する力よりも大変により力強く働かせているのです」

老人は答えて言いました、「未だ言うべきことがある様だ。しかし我々は正しい小道の上にいる。ここでもう一度幾何学的観念と出会い、そして如何にしてそれらを事物の代わりにするのかを観察しただけで我々には十分である。それは形式によって、つまり長さと角度によって隠れているものである。あるいは切離し難く結び付いている性質に代えられるものである」

《楔》 ルブランが言う楔は、最も良くこれらの事物を明るみに出すでしょう。「私は家具の下に楔を押し入れます。数々の固体がそれらの形状を保持していることを単に仮定しながら私が注目するのは、家具が水平になかなか動かないが楔の効果で、もしも高く上がるとしても全体の移動としては一部分であり、水平には進むことが出来ないことです。かくして私たちは公式を応用します。楔は如何なる仕事も提供しませんし、持ち上げるための私たちの仕事は少なくとも変えられることとなります。そして家具を一センチメートル持ち上げるのに私たちは六センチメートル押すこととなりますが、それに反してこの六センチメートルの長さに私たちが行使する力は六倍も小さなものです。私は摩擦を除外しています」

《滑車》 私は遮って言いました、「計算した力を実際の力と比較して測定出来る様にして下さい。但し、摩擦も重要です。それというのも絶えず動く重さは、私たちの楔を追い払うに違いないからです。しかし滑車の様なものが他に何かあるでしょうか。その運動は摩擦の抵抗もなく、多くが空中です。如何なる場合でも私たちの力が最早増加されずに済むのは明白の様に私には思えます。しかし滑車とは何でしょ

うか」

老人が答えました、「それは継続した梘子である。秤の様に中央で支えられているものだ。少なくとも秤にあっては滑車の奇跡が結合していて、一方の竿を直ぐにもう一方の竿の代わりにしているのである。秤皿の一方が下がり続けると、もう一方が上がるのを何時までも可能にするのである」

ルブランが遮って言いました、「奇跡と言わなければならないのでしょうか。この言葉は悟性には不快に響きます。もしも私が全て等しい幾つかの秤の竿をお互いに極めて近づけて星状に並べれば、滑車の様になって奇跡ではなくなります。そして摩擦はその力がロープに加えられても二次的なものです」

《梘子》 老人は答えました、「それで私は滑車にとっても同様に重要な何かを認める。それはロープが梘子の長い腕に働くが、その代わりに軸とか輪心は小さなものに対しても揺れ動くのである。それからなお又、表面が磨かれてグリースが塗られるのかも知れない」

私は言いました、「数々の事物がその様に表されるとするなら、巻揚機以上に明らかなものは他に何かあるのでしょうか。持ち上げるための分銅が、継続した梘子を中央にして吊されています。そして、梘子の両端には明らかに各々分銅の半分の重さしかかかっていません。もしも、支えられているロープのうち的一本を引っ張ると、分銅にかかっているロープによって二つの小道が生まれることも又分かります。それは私たちを公式へ導くものです。しかしここでもう一度、諸公式を無しで済ませることが出来ます。全てが組み合わされた梘子によって動くのです」

老人が答えました、「全てが色々な大きさの滑車によった伝導装置として動くのである。そして、もしも歯の付いた一つの車輪と二枚の歯板によって滑車を取り替えれば、経過は容易に行われることになる」

ルブランは言いました、「ジャッキですね。しかし、これらの単純な器具における必然性はどこから見えて来るのでしょうか」

《慣性》 私は答えました、「それは私たちのあらゆる分析における繰返しとして戻って来ます。そこでは常に固体は動かないということが前提にされます。つまり如何なる種類の労働も固体の内部では行われないということです」

老人は言いました、「慣性とは些細なものではない。この偉大な観念が我々を大変に窮屈な儘にしている存在には頓着せず、十分に表すことに私は々疑問であった。そして、我々が自然を分析する時に出会う大変自然な間違いの全ては、意志とか内部の働きというものからやって来るのである。それらは我々がぶつかったり、ぶつけられたりする事物において先ず想定するものである。この慣性によって、我々は事物の中に人間のイメージを消すのを見分けることである。 《内部》 我々は、物質的な事物の運命が内部の隠された自然と同様に、決して所有していない他の事物から受入れる運動や圧力に少なくとも依存していると考えたいのだ。そして常にそれと同一の仕事を思い出しながら悟性が働いたのもそこからである。しかし、この観念は既に何らかの熟考を望んでいる。我々は、事物に対して余りに閉鎖されているこの書齋の中で、一種の砂漠に過ごしていたのだ。しかし、そうでなければならなかったのだ。ここには明るくなっている空がある。確かに、私は巻揚機のベルトを締めているのだ。私は、流れる様なこの種の分岐点と結び付いている締めるための力を、容易に想像するものとして理解して欲しいのだ。私は増大したこの力に感嘆する。しかし、締め金がベルトを引っ張る手よりも半分以下の小道しか生まないことに、それ故に注目しているのは誰であろうか。どんな事物においても常に我々は、我々の衝動と怒りを感じ取るのを信じている。分銅は私の荷物の中にある様に私には思えるのである。しかし私がそれを感じるの私の腕ではない。絵画のための一時間は、これらの全ての話から私を洗い落としてくれる様になるのである」(完)

アラン
海辺の対話（上）

<http://p.booklog.jp/book/125007>

翻訳者: 高村 昌憲

翻訳者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125007>

電子書籍プラットフォーム : パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト